

◇研究助手報告◇

劉氏稿「經部義」試訳稿

——華文読解の為に——

神谷 静治

經部説研究については近年、特にその成果が提出されている。戸崎博士のダルマキールティ著作の一連の研究、木村俊彦氏のニヤヤビンドヴの研究である。また、特にチベット訳著の研究に関しては、御牧克己氏が重要な成果を提出されて、いわゆる後期經部学説は非常に明らかになってきた。しかし、初期の学説についてはまだ不明な点が多い。金字塔ともいふべき、ブサン氏の俱舍訳はこの初期学説について非常に有益な見解を示している。卒直に見て、私見であるが、このブサン氏の成果を越えるものはまだ提出されているとは思われない。

ここでは、經部の祖師といわれるクマールラータ師に関して報告させていただきたい。

この論師については近年、加藤純章氏が精力的にその成果を提出されている。氏の最も新しい論文は、最近、ラモット教授への論文集に載せられていて、容易に見ることができる。ただ、氏の中国文献の手続きに関して、少し甘さが感じられるように私は思えるが、いかがであらうか。cf. ① Michael. Hahn: 「Kumārāśas Kalpanā-maṇḍikā Dīṣṭāntapankti, Nr. I. Die vorzüglichkeit des Buddha」(Zentralasiatische studien, 16, 1982年) pp. 309~336 ② 陳寅恪: 「童受論鬘論梵文殘本跋」(陳寅恪先生文史論集, 一九七三年, pp. 309~313)

次に、あまり見ることが少ない論文を示して別の角度からの經部説研究への一つの手がかりとしたい。

劉 定權「經部義」現代佛教学術叢刊

(原載未見)

「經部義」劉 定權

第一章 經部之起源試訳稿

この章は、クマールラータ師を二人とし、加藤氏の論旨と対比される。

(1) 引用文献は原文のままとした。

(2) 訳文はもとより正確とはいえず、大体の意識である。

一、經部の起源

經部の起源を考えると、数説あり。

異部宗輪論では、

「至第四百年初從説一切有部復出一部名經量部ノ亦名説転部ノ自称我以慶喜為師。」述記では

「此師唯依經為正量不依律及対法ノ凡所援拠以經為証ノ即經部師從所立為名。經量部亦名説転部者ノ此師説有種子唯一種子現在相統至後世故言説転ノ至下当知。旧云説度部ノ然結集時尊者慶喜專弘經藏ノ今即以經為量ノ故以慶喜為師ノ從所立為部名。滿慈弘宣対法ノ近執弘毘奈耶ノ既不依於対法及律ノ故今唯以慶喜為師也。」

三論玄義では

「三百年中從薩婆多部又出一部名説度部ノ謂五陰從此世度至後世得治道乃滅。亦名説經部ノ謂唯經藏為正ノ餘二皆成經耳。」

この三論玄義の説は大体前説と同じであるが年代が少し早い。

この部派の祖師については、俱舍光記六

「鳩摩羅多此云豪童ノ是經部祖師ノ於經部中造喻鬘論、癡鬘論、顯了論等。經部本從説一切有部中出ノ以經為量名經部ノ執理為量名説一切有部。」

この師の時代と地域について、

西域記、咀叉始羅國の頃

「昔經部拘摩羅羅多(唐言童受)論師於此製述諸論。」

同、羯盤陀國の頃

無憂王命世ノ即其宮中建翠堵波。其王於後遷居宮東北隅ノ以其故宮為尊者童受論師建僧伽藍。尊者咀叉始羅國人也。日誦三万二千言ノ兼書三万二千字。其所製論凡數十部ノ即經部本師也。当此之時東有馬鳴ノ南有提婆ノ西有龍猛ノ北有童受ノ号为四日照世、故此國王聞尊者盛徳ノ興兵動衆伐咀叉始羅國脇而得之ノ建此伽藍式昭瞻仰。」

これによつてこの師は咀叉始羅に生まれ、羯盤陀に住んでいたことがわかる。

この師の年代について、二つの説がある。

一つは、西域記の「四日照世」の説によつて、仏滅後、五、六百年とする。

もう一つは、三論玄義の次の記述による。

「有訶梨跋摩高足弟子序其宗曰:成実論者仏滅度後九百年内有訶梨跋摩此云師子鎧之所造也、其人本是薩婆多部鳩摩羅陀弟子。」

これによれば、この師は仏滅後、八、九百年の人となる。

また唯識述記八によれば

「此破日出論者ノ即經部本師ノ仏去世後一百年中ノ北天竺恒刀翹羅國有鳩摩羅多此言童首ノ造九百論。時五天竺有五大論師ノ喻如日出明導世間ノ名日出者。以似於日、

亦名譬喻師。或為此師造喻鬘論集諸奇事ノ名譬喻師ノ經部之種族ノ經部以此所説為宗。當時猶未有經部ノ經部四百年中方出世故。」

これによれば、この師は仏滅後一百年中に生まれたことになり、諸説にくらべて早いことになる。

西域記によれば、この師は無憂王の後にいたことになる。旧伝は無憂王は如来涅槃後一百年に名盛があったと伝う、最近の考証によれば阿育王の灌頂は丁度、仏滅後二百十九年になり、この一百年というのは阿育王時代の誤りにならって誤ったのかもしれない。

結論的に言えば、この師の年代は早くても仏滅後百年より以前とすることはできない。かつ、すでに經部の本師になっているから經部成立の後より以後ということとはできない、それ故、遅くとも仏滅後第四百年初を過ぎることはない。「四日照世」の説に関して、師以外の三人は同じ時代でないというのもその通りであると言える。また唯識述記が述べる「五師日出の喩」はその言わんとするところは詳しくわからないが時代は仏滅一百年中である。馬鳴、提婆、龍猛と並んで記述されているのもまた疑わしい。訶梨跋摩が師とする人物は別の鳩摩羅陀であらう。弟子はこの人物が薩婆多部に属すると述べるから。

譬喻師の名は異部宗輪論に見えないとはいえ、唯識述記は次のごとく述べる。要約して述べると、譬喻師は經部より先に存在し經部の基盤となった、というのは經部は仏滅後、四百年に世に現出したからである。玄奘が述べるところによれば、婆沙の結集もまた、仏滅後、四百年であるという。すなわち、經部が世にあらわれた時と同じであり、經部が盛んになったのはそれ以後である。それ故に唐訳の記沙には經部師の義が二つあり、北涼の旧訳にはその文がないのである。また唐訳卷三は「正性離繫」を譬喻師の説とし、涼訳卷一はある人の説とする譬喻が部派となっていたのはそんなに早いことではない、とする証左となる。

唐訳一百三十一（婆沙論）は、

「西方諸師譬喻尊者説色於色無同類因ノ如前雜蘊同類因中已広分別。」

唐訳卷十七は

「外国諸師有作是説。」とする。

涼訳卷十が譬喻者の説とするのを考える、とこの「譬喻者」はすなわち「譬喻尊者」である。婆沙が述べる譬喻者の名前はおそらくすると一部派を示しているのではなく、一人の人物を示しているのかもしれない。すなわち、鳩摩羅多、その人であろうか？

婆沙以後、俱舍論、順正理論、中觀釈論、唯識述記などが記述する「經部譬喻者」

はすべて、經部と譬喻者と區別して記述している。

唯識述記二十一は

「今此設遠經部ノ兼破譬喻師。譬喻師は經部異師ノ即日出論者ノ是名經部。此有三种：一、根本ノ即鳩摩羅多。二、室利羅多ノ造經部毘婆沙ノ正理所言上座是。三、但名經部。以根本師造結鬘論広説譬喻名譬喻師ノ從所説為名也。其実総是一種經部。」
基論師の言葉は以上のごとくである。順正理論は常に、「譬喻」「上座」「經部」を區別して述べる。すなわち、

順正理論卷十八は

「此中上座作是釈言」

同じ卷十八で上述の文の後で

「非譬喻者可作是言」

同、卷三は

「故彼上座及餘一切譬喻部咸作是説」

順正理論が述べる譬喻者とは特定の人物を示すのではなく、譬喻者の中の一人、すなわち、「上座」を示しているのを知る。

同卷三十五は

「此中上座作如是誦。彼作是説ノ經部諸師所誦經中曾見有此。」

これによれば「上座」はまた經部師の一人であることを知ることができる。

そして同、卷七が譬喻部師が批判する説を、俱舍論卷二は經部諸師の説としている。これは譬喻部も經部の一部である証左となり、基論師の言葉は間違っていない。

俱舍光記三十六は

「經部中室利羅多此名執勝ノ正理呼為上座。」

正理十九は（順正理論卷十九）

「但是上座其年衰朽。」

同二十

「尚年已過居衰耄時。」

同二十五

「如是上座凡有所言親教門人及同見尚不承信ノ東方貴此実謂奇哉！」

同二十六

「悲哉！東土聖教無依。」「惑亂東方愚信族類。」

同二十七

「詳彼但應欺東方者。」

同八十

「現見東方証法衰微教多隱没ノ北方証法猶増盛故。」

これらの記述によれば、上座すなわち執勝は当時、年老いて東方地域を教化していたことがわかる。

セイロン等の伝では、説転部と説経部を区別する。これは東晉に訳された舍利弗問經と同じである。

異部宗輪論および三論文義は異名と解する。舍利弗問經は、経量、欽光は上座より出たとし、異部宗輪論とは異っているが、南海寄帰内伝が上座を三つに分け、有部が四つに分けている説に近い。今はかりに記述し将来の考証を期待する。

Nāmarūpasamāsa 〇

心心所相應論の考察

勝 木 太 一

1

Nāmarūpasamāsa は、ケーマ尊師によって著わされたもので、俗に巴利九註といわれるものの一書である。この書にはどうも二系統の写本があったらしいが、本書の成立年代は、内容かみて、Abhidhammasaṅgaha に近いことから Anurāda と同時代か、それ以後と考えられ、およそ5〜6世紀初め頃とみてよいだろう。この書の有す意義は89心の分類定義と、心作用による分類を詳細に定義している点で、名色の關係を明確にするためのものと考えてよい。また言語による内含や同義異音についても詳しくのべているが、これは他の八註には見出しがたいもので注目しうるものである。

2

Nāmarūpasamāsa は前半部分で89心の分類を

- ① 欲界・色界・無色界・出世間界
- ② 色等起・威儀路
- ③ 無因・一因・二因・三因
- ④ 善心・不善心・異熟心・唯作心
- ⑤ 転向・見・触・領受・推度・確定・二住立・三住立・四住立・五住立・結生・被所縁・笑・有分・死

のように様々な角度からけんとうしている。その中で rāsi (『khaṇḍha』による分類は、他書にはあまり見られないもので、特に心所との相應を明確にするためになされたものである。この心々所相應は「Abhidhammavāṭāna」もかなり詳細にのべているが、Nāmarūpasamāsa はいわば、rāsi によるカテゴリー分類のあとに「語を決定しているもの」というように④純粹語 ⑤区分されるもの ⑥区分されぬもの。と分けて、本質を明確にしようとしている。

パリーの教理では52心所以上を数えられるが、このような Nāmarūpasamāsa の心所のべ方は、Abs. や Visn. には全くみられないものである。それは心の作用をふまえて、その成立の本質がどこにあるかという認識論的問題をテーマとするという態度によっているといえよう。すなわち、Nāmarūpasamāsa は心心所相應の問題を中心として、その成立の形態の様相を述べているのである。その観点は「法」の論理性の立場を考えるものでなく、認識主体のその作用をなさしめるカテゴリーを探究しようとするものである。しかし、そうはいってもやはり nāma は受想行識と同義であるかぎり、色との結合によって認識を成立せしめるものであるから、そのような主体的認識の成立を決定するものがどのようなものであるかというテーマは中心としてすえられていてもおかしくないのである。

3

Nāmarūpasamāsa が心の分類によって89心の性格を明確にしようとしたことは、さらに心所とのつながりを考慮してのことである。これは善心所では17のカテゴリー (rāsi) の分類で心所の性質を明らかにし、各心にどの心所が相應しているかを述べている。

この17のカテゴリーに教えられた56心所と略された心所4心所の60心所が、89心のうちのどの「心」に相應し、その心の相應する心所がどのカテゴリー (rāsi) に入るかを分析しているのが、Nāmarūpasamāsa の心心所論のテーマである(注一)。この17の rāsi によって、それぞれの心に相應する心所を撰して明確にされている。ここで一例として「喜俱智相應無行」(注二)心についてまとめてみよう。表にまとめたものを見ると、「喜俱智相應無行」心に相應する心所が、30法であることがのべられ、その30法をカテゴリー別にして重復を明確にしている。即ち、区分されるもの「心より慧」の12は重復を数えて38で、「区分されぬもの」が、30法の純粹語の残りの18であり、全てで56となり、省略されたものを入ると60心所となる。さらに「不定で略されたもの」を加えると65心所となる。

この省略された9心所は「聖典」に省略されたもので、法集論には見いだせないも